

営農情報

詳しくはお近くの下記事業所までお問い合わせください。

東尾道営農センター ☎0848-56-1231
 尾道北営農センター ☎0848-29-9611
 向島営農センター ☎0848-44-2106
 因島営農センター ☎0845-25-6161
 世羅営農センター ☎0847-25-5029

浦崎支店 ☎0848-73-3311
 御調支店 ☎0848-76-2242
 甲山支店 ☎0847-25-5035
 世羅西支店 ☎0847-37-7100

水稲

近年では気象の変動が大きくなっており、高品質・良食味米を安定して生産することが難しくなってきました。異常気象に耐えるためにも、稲に必要な養分や水分を十分に供給できる土壌を目指して、積極的に「土づくり」を行いましょ。

また、秋起こしを実施せず、ひこばえが伸びた圃場は、イノシシやシカの餌場となってしまう。

次年産に向けた「土づくり」と「獣害リスク低減対策」として、今からできるこ

とを実践していきましょう。

「土づくりの必要性」

「イネは土で作れ」といわれるように、土づくりは、圃場管理の基礎となるものです。水稲の収量は地力に依存する割合が大きく、中でも土壌有機物の割合が大きくなっています。土の力(地力)を向上させることによって

- ・天候不順に影響されにくい生育
- ・病害虫に対して抵抗性が高い生育
- ・安定した収量や高い品質が期待できます。

◆こんな土は要注意！

- ・作土が浅く、土が硬くなっている
- ・漏水する
- ・毎年収量が上がらない
- ・収量変動しやすい
- ・秋落ちを起こしやすい

尾道南部地域において発生が多かった「こま葉枯病」は、地力の低下が原因の一つとされています。

地力の向上と共に、病害(紋枯病・稲こうじ病等)の発生した圃場では、病原菌の越冬を防ぐため、稲わらの持ち出しを行い、来年度の発生を抑制しましょう。

「土づくり対策」

◆秋起こし

収穫後の圃場に残っている株や稲わらを圃場にすき込み、腐熟させることで、ケイ酸成分等を土壌に返してやることで

できます。

効果を高めるため、稲わら腐熟促進資材を施用しましょう。稲わら腐熟促進資材の施用時期は、地温が高いうちに行いましょう。

1 回目とはトラクターの走行スピードを上げ、浅く掻いていきます(10cm程度)。土と稲わらを混ぜるような感覚で行ってください。

2 回目以降は走行スピードを下げ、深く耕起します(18cm程度)。作土層全体を攪拌することで、下層に溜まっているミネラル成分を上層に引き上げます。

土づくり資材を投入する場合、耕起前に施用してください。

田んぼの断面図



◆有機物を施用

有機物が分解されると腐植が生成されます。腐植の少ない土は地力が低下し、保肥力も弱くなるため秋落ちしやすくなり、圃場が硬くなり、碎土も難しくなります。

有機物(堆肥等)を投入し、腐植の生成を促しましょう。

◆土づくり資材を散布

肥料の3要素(窒素・リン酸・カリ)以外にも、植物が生育するためにはミネラル成分も大事な要素です。毎年圃場にはミネラ

ル成分を補給していくようにしましょう。

また、イネは他の植物と違い、ケイ酸を選択的にたくさん吸収する植物です。高温障害や充実不足および倒伏を防ぐ意味でもバランスよく資材の活用を行いましょう。

◆ガス湧き防止

土中で有機物が微生物によって分解されるときに酸素が少なくなると発生する「メタンガス」がガス湧きの主な原因です。メタンガスは、地球温暖化の原因の一つである温室効果ガスとしても知られ、田植え後の圃場で発生すると、初期生育(活着や分げつ)が抑制され、減収に繋がります。

次年度の田植えまでに稲わらを分解し、ガス湧きを抑制するには、前述の秋起こしと稲わら腐熟促進資材の活用が有効です。

収穫後の株や稲わらがそのまま残っている圃場では、早急に秋起こしを実施してください。

柑橘

本年度の早生ミカン以降の品種では、収穫が遅れると浮皮が発生する恐れがあります。分割採収を徹底し、着色基準に達した果実は早めに収穫しましょう。

【みかんの収穫】

2度切りを徹底し、軸長にならないよう注意しましょう。軸が長い果実が混入している荷口は、果実に軸がささり腐敗果が多くなりません。収穫が早いほど次年度が着花しやすくなるので、豊作樹は早めに収穫が終わるようにしましょう。



▲軸が果実にささり水腐れが発生

◆いしじの収穫

いしじは紅がのり、ヘタが黄緑色になった時が収穫適期です。着色の早い園地では、ヘタ周りのひび割れ(過熟果)が出る可能性があるので注意しましょう。



▲いしじヘタ周辺のひび割れ

【温州みかん収穫後の尿素散布】

収穫後に尿素200〜300倍の散布が隔年結果は正に効果的です。気温が8度を下回ると、吸収が悪くなりますので暖かい日に散布しましょう。

【中晩柑類の収穫・貯蔵のポイント】

中晩柑の収穫は、完全着色果の収穫が基本となります。

中晩柑類は防除を徹底し、正品率の高い果実をつくっても、貯蔵管理で品質低下を起すことがあります。

果実の取扱いは丁寧に行い、品種ごとの温度・湿度に注意しながら管理しましょう。

中晩柑類の収穫後の管理

品種	収穫時期	貯蔵方法
ネーブル	完全着色を基本とし、退色する前に収穫する	貯蔵温度 6〜8℃ 貯蔵湿度 85% 粘性果防止のため換気を徹底する
はるみ	12月上旬〜下旬 ※夏秋期にかん水が出来ていない園地は果皮障害が早期から発生するので収穫を早める	貯蔵温度 6〜8℃ 貯蔵湿度 85% 供腐りしやすいので腐敗果はこまめに点検する
ポンカン	早生系…12月中旬	貯蔵温度 5度 貯蔵湿度 85〜90%
普通八朔	12月下旬〜1月上旬 ただし、寒さの心配のない園地は1月採収とする。	貯蔵温度 5〜7度 貯蔵湿度 90%

◆貯蔵時の共通管理

・適正入庫量
一坪当たり800〜1,000kg。コンテナ使用時は七分詰めとし、コンテナの間隔を保ち通気する。

・換気

果実の貯蔵適温と外気温が最も近い時に1日1回行う。

・果実の点検

果実の取り扱いには丁寧に行い、腐敗果の点検をこまめに行う。

◆レモンの収穫

着果が多い状態で寒さを受けると樹体被害がひどくなります。寒い園地では、

年内収穫率を高める必要があります。収穫時にヘタを深く切ると、貯蔵中腐敗しやすくなるので注意しましょう。

【防寒対策】

県東部では、例年12月10日前後に初霜が降ります。なるべく11月下旬までに防寒を完了するようにしてください。防寒資材では、3重袋の保温効果が1番高くなります。レモンの苗木はパスライトなどで防寒を徹底しましょう。



▲パスライトを利用した苗木の防寒(ホッチキス止め)

【病害虫防除】

・ハダニの防除

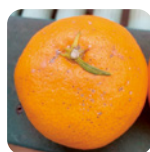
貯蔵中のハダニ被害を防ぐため、収穫前にハダニ防除を徹底しましょう。腐敗防止剤と混用できます。

・中晩柑類のヘタ落ち防止

八朔・ネーブル・伊予柑などは、貯蔵中のヘタ落ち防止や落果防止目的で、マデックEWを散布しましょう。
※年間1回しか散布できません。

・カイガラムシの防除

ヤノネカイガラムシやサンホーゼカイガラシが増加傾向にあります。収穫後に95%マシン油を散布しましょう。



▲サンホーゼカイガラシ

・腐敗防止剤の散布

ベンレート水和剤とベルフトフロアブルを混用散布します。ベルフトフロアブルは、5度以下の場所では保管すると粘性が強まります。粘性が強く容器から出にくい場合は、50度以上のお湯に容器ごと1時間以上つけてください。

【夏秋梢の処理】

次年度の春芽の発生を促すためとカイヨウ病防止目的で夏秋梢を処理します。強い枝は芽つぼの上で処理し、弱い枝は芽つぼの下で処理します。直立し樹形を乱す枝は基部から切除します。しらぬひ・はるみは、次年度の結果母枝として夏芽を利用するので切らないでください。
※複数出ている場合は先端を1本にします。

【しらぬひ・はるみの果皮障害防止対策】

しらぬひやはるみは、完全着色後に雨が多いと果皮障害が発生することがあります。ジベレリンを散布することにより発生を遅らせることが出来ます。
使用薬剤 ジベレリン1ppm
散布量 葉から滴り落ちない程度
散布時期 はるみ 6分着色頃
しらぬひ 8分着色頃



▲しらぬひ果皮障害



▲はるみ果皮障害

【苗木の管理】

◆ジベレリンの散布

翌年の花芽を減らし、新梢の発生を促すため11月～12月にかけジベレリンの50ppmを散布します。

落葉果樹

今月は苗の植付け、土づくり、園内清掃といった次年度への準備を行う月となります。どの作業も、労力的に大変な作業ですが、とても重要な作業ですので計画を立てて必ず行いましょう。

【加温施設】

無駄に重油を使用しないためにも、ハウス内の隙間を塞いだり、サイドやハウス内上部への二重カーテンで多層化し、断熱性や密閉性を確保して、日中日照により施設内に溜まった熱をできるだけ逃がさないようにしましょう。

また、加温機の保守点検を行い、缶内の燃焼カスの掃除とノズルの洗浄・交換を行い、燃焼効率を高めムダな燃料の使用量を抑えましょう。

ハウス内の温度ムラ改善に循環扇が効果的です。温度ムラ改善だけでなく、多湿病害の予防、果実焼けや葉焼けの防止などの効果も期待できます。

【園内清掃】

落ち葉や落果は、病害虫の越冬源になり、翌年の発生源となります。必ず園外に持ち出し処分しましょう。

【土づくり】

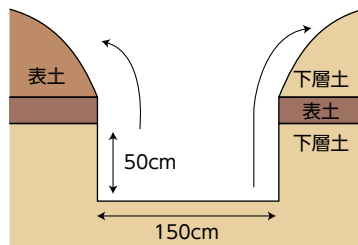
土づくりは農業の基本中の基本で、絶対に欠かすことのできない重要な作業です。また、収穫時は毎日圃場に入るため、地面は踏み固められ、通気性の悪い状態になっています。

安定的に高品質果実生産を行うためには、根が十分に活動できる土壌環境が必要です。有機物の施用や深耕などにより、土壌の透水性や通気性を向上させましょう。深耕は有機物を土壌中に鋤こむように

行いましょう。有機物は必ず完熟した物を施用しましょう。未熟な物は、根腐れやチッ素飢餓などによる樹勢衰弱を引き起こしやすいので注意してください。

【苗木の植え付け】

11月～12月上旬が秋期の植付け時期となります。植付けの1カ月前を目安に、植穴の準備をしましょう。直径100～150cm、深さ50cmの植穴を準備し、完熟堆肥、ようりん、苦土石灰を土と混ぜておきましょう。



①表土と下層土を分けて植え穴を掘る

◆植え付けの手順

①傷んでいる根を取り除き、殺菌剤で消毒する。

②苗木の根は、根本を高く、根先を低く四方に広げる。

③植え穴を深めに掘り、深植えとせず接木部分が地上に出るようにする。

④苗木の先端を、地面から30～40cm（ぶどうは20～30cm）の所で切り返す。

ぶどう

【休眠打破】

施設栽培では、12月10日頃に処理を行うのが効果的です。

デラ C X 10 20倍
大粒系 C X 10 10倍

◆注意

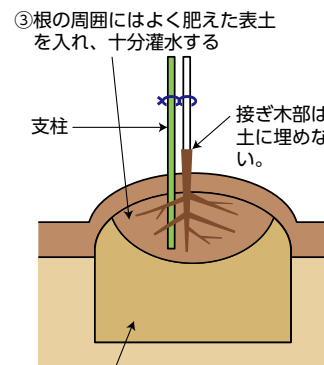
※年間の使用回数は1回です。

※芽枯れ防止のため剪定後1週間以上間隔をあけてください。

※乾燥時も芽枯れします。

【剪定】

基本的には、若木、強樹勢樹は、間引き剪定主体の弱剪定、老木、弱樹勢樹は、切り返し剪定主体の強剪定で行ってください。



②下層土と有機物、石灰、リン酸などをよく混和して、足でかるく踏みながら入れる

⑤支柱を立て、苗木が風などで揺さぶられないように固定する。
⑥植付け後は、たっぷり灌水をする。
※柿は特に根が弱いので植付け時は注意してください。

さい。

もも

落ち葉や落果は、病害虫の越冬源になり、翌年の発生源となります。必ず園外へ持ち出し処分してください。

なし

【剪定の準備】

本格的な剪定の前に、誘引ひもの除去と間伐、荒剪定を行ってください。

いちじく

【園内の清掃】

園内に落葉や収穫できなかった果実がそのまま残っていますと、翌年の病害虫の発生源となりますので、速やかに園外に持ち出し処分しましょう。

家庭菜園

朝晩の寒さが厳しくなってきました。今月から秋冬野菜の収穫時期となります。実りの秋を楽しみましょう。

【野菜の防寒対策】

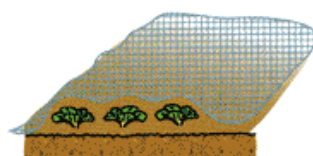
ホウレンソウやコマツナ、ネギなどの小物葉菜類は耐寒性が強く、霜にあたることで甘味も増します。10月半ばまでに種を撒くと防寒しなくても収穫できます

が、厳寒期には、良品質栽培のために防寒がおすすめです。

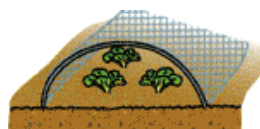
また、霜に弱いレタスなどは保温が必要ですので、べた掛け資材によるじか掛けかトンネル掛けなどを行いましょう。

◆べた掛け資材

簡単な手段で、べた掛け資材(不織布・寒冷紗)を被覆する方法があります。通気性、透水性はありますが、農ビや農ポリと比べると保温力は劣ります。



A じか掛け



B トンネル掛け

◆プラスチックフィルム

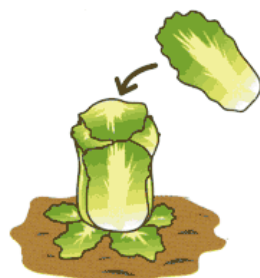
農業用のビニールやポリエチレンフィルムをトンネル状に被覆する方法です。保温性は高いですが、日中の気温が27℃以上になると障害がでる可能性がありますので注意が必要です。

本葉2〜3枚までは、密閉しておいて構いませんが、その後は頂部に穴をあけるか、裾を開けて換気しましょう。

◆その他

ハクサイやカリフラワーは、しおれた大きな外葉3〜4枚を球の頭に覆っておくと簡単な防寒対策になります。

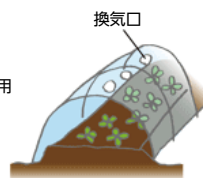
長く圃場に置きたい場合は、少し霜にあたつて若干しおれた葉で、結球全体を包むようにひもで縛りましょう。



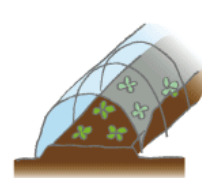
しおれた大きな外葉を3〜4枚重ねて帽子に



トンネルの仕方



換気孔による高温回避
トンネルの上部又はサイドに穴をあける(気温の上昇にともない穴を大きくし、数も増やす)この方法は換気労力は不要であるが、夜温の保温が劣る



すそ換気による高温回避
ビニールの裾をたくし上げて換気(洗濯ばさみ等でビニールが落ちるのをとめる)

【野菜の生理障害】

綺麗で形の良い野菜が収穫できるに越したことはありませんが、中には異常が発生したものもあると思います。各野菜の代表的な生理障害を紹介いたしますので参考にしてください。

◆大根の生理障害

・空洞症(ス入り)

内部に空間や、軟弱な部分が生じる。取り遅れや肥大期の水分不足などによって引き起こされる。



・岐根(きこん)

根菜類の根が分かれる症状。

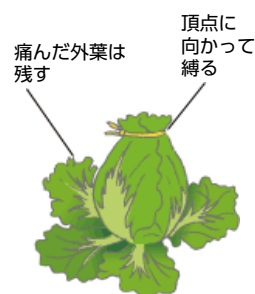


生育中に根の生長点に害虫や未熟堆肥などの影響によって損傷すると発生する。

◆ジャガイモの生理障害

・緑化

表面が緑色に変色し食味が落ちる。塊茎に日光が当たることによって引き起こされる。



痛んだ外葉は残す

頂点に向かって縛る